

教育心理学コース

－コース全体の特色－

- * 院生自身の研究関心を最大限に尊重します。
- * 研究の土台となる心理学の方法論や分析法・統計解析の手法等の習得を重視します。
- * 院生は、各自の研究領域を深く追究するだけでなく、心理学全般にわたる広い知識や思考力を身につけることが推奨されます。
- * 修士課程の院生を対象とした修論検討会（年2回の検討会と1回の発表会）、博士論文検討会（年1回）のほか、博士の学位をとったばかりの若い研究者を招いての講演会（ブラウンバッグ）も年に何回か開かれます。
- * 研究室間の壁はきわめて低く、専門や研究室を異にしても、院生相互の交流がきわめて活発であり、院生主体の研究会や読書会などを通して、互いに学び合う伝統があります。

－各教員・研究室の特色－

◆『教育情報科学』分野◆

◇岡田 謙介 准教授

* 関心領域・研究テーマ

心理・教育・行動データをモデリングし、現象の理解と予測に役立てることに興味を持っており、そのためにとくにベイズ統計学の方法論と応用を研究しています。心や行動について科学的に理解していくためにも、社会科学的な問題を実証的に解決していくためにも、統計学の理論と方法を役立てられる場面はますます広がっていると思います。現在、研究室で取り組んでいる主なテーマは以下の通りです（もちろん、研究可能なテーマがこれに限られる訳ではありません）。

- ・ ベイズ統計学・ベイズ統計モデリング
- ・ 科学的な質問紙調査法の開発と応用、反応時間の活用
- ・ 認知診断モデル、項目反応理論、テスト等化
- ・ 調査や準実験状況における統計的因果推論

* 最近の論文・著書

1. Okada, K. & Bunji, K. (2020). Increase of reliability by incorporating response time into the paired-comparison psychological measurement. *Behaviormetrika*, Online Ahead of Print.
<https://doi.org/10.1007/s41237-020-00109-5>
2. Yamaguchi, K., & Okada, K. (2020). Variational Bayes inference for the DINA model. *Journal of Educational and Behavioral Statistics*, Online Ahead of Print.
<https://doi.org/10.3102/1076998620911934>

3. Bunji, K. & Okada, K. (2020). Joint modeling of the two-alternative multidimensional forced-choice personality measurement and its response time by a Thurstonian D-diffusion item response model. *Behavior Research Methods*, Online Ahead of Print.
<https://doi.org/10.3758/s13428-019-01302-5>
4. 丹亮人・岡田謙介 (2020). 多値アトリビュートにおける認知診断の正確度への Q 行列の誤設定の影響：アトリビュートの階層性がある場合の検討. 行動計量学, 印刷中.
5. 丹亮人・岡田謙介 (2020). 連続型の特性値をもつ補償認知診断モデル. 日本テスト学会誌, 印刷中.
6. Bunji, K. & Okada, K. (2019). Item response and response time model for personality assessment via linear ballistic accumulation. *Japanese Journal of Statistics and Data Science*, 2, 263–297. <https://doi.org/10.1007/s42081-019-00040-4>
7. 藤田和也・岡田謙介 (2019). 主観確率を含んだ累積プロスペクト理論モデルの推定精度について. 行動計量学, 46, 53-71. <https://doi.org/10.2333/jbhmk.46.53>
8. 藤田和也・岡田謙介 (2019). 非認知的スキルを効率よく推定するための反応時間を利用したコンピュータ適応型テスト. 日本テスト学会誌, 15, 45-57.
https://doi.org/10.24690/jart.15.1_45
9. 菱山完・岡田謙介 (2019). PISA2015 における探究型教授法が理科の到達度に与える因果効果の検討. 日本テスト学会誌, 15, 135-148. https://doi.org/10.24690/jart.15.1_135
10. 北條大樹・岡田謙介. (2018). 係留ビネット法による反応スタイルの分類 ヨーロッパの大規模健康調査を例に. 行動計量学, 45, 13-25. <https://doi.org/10.2333/jbhmk.45.13>
11. Yamaguchi, K. & Okada, K. (2018). Comparison among cognitive diagnostic models for the TIMSS 2007 fourth grade mathematics assessment. *PLoS ONE*, 13(2): e0188691.
<https://doi.org/10.1371/journal.pone.0188691>
12. Shibuya, Y., Okada, K. Ogawa, T., Matsuda, I. & Tsuneoka, M. (2018). Hierarchical Bayesian models for the autonomic-based concealed information test. *Biological Psychology*, 132, 81-90. <https://doi.org/10.1016/j.biopsycho.2017.11.007>
13. Okada, K., Vandekerckhove, J. & Lee, M.D. (2018). Modeling when people quit: Bayesian censored geometric models with hierarchical and latent-mixture extensions. *Behavior Research Methods*, 50, 406-415. <https://doi.org/10.3758/s13428-017-0879-5>
14. 岡田謙介 (2018). ベイズファクターによる心理学的仮説・モデルの評価. 心理学評論, 61, 101-115. https://doi.org/10.24602/sjpr.61.1_101
15. 三浦麻子・岡田謙介・清水裕士 (2018). 統計革命: Make statistics great again ー特集号の刊行にあたってー 心理学評論, 61, 1-2. https://doi.org/10.24602/sjpr.61.1_1
16. Okada, K. & Mayekawa, S. (2017). Post-processing of Markov chain Monte Carlo output in Bayesian latent variable models with application to multidimensional scaling. *Computational Statistics*, 33, 1457-1473. <https://doi.org/10.1007/s00180-017-0759-6>
17. Okada, K. & Hoshino, T. (2017). Researchers' choice of the number and range of levels in experiments affects the resultant variance-accounted-for effect size. *Psychonomic Bulletin & Review*, 24, 607-616. <https://doi.org/10.3758/s13423-016-1128-0>

18. Okada, K. (2017). Negative estimate of variance-accounted-for effect size: How often it is obtained, and what happens if it is treated as zero. *Behavior Research Methods*, 49, 979-987. <https://doi.org/10.3758/s13428-016-0760-y>
19. M. D.リー, E.-J.ワーゲンメイカーズ (著) 井関龍太(訳) 岡田謙介(解説) (2017). ベイズ統計で実践モデリング：認知モデルのトレーニング. 北大路書房.

*研究指導の方針・モットー・研究室の雰囲気

週に1度ゼミを行い、各自の研究の進み具合について共有し議論して、その後にごはんに行っています（緊急事態宣言でごはんは休止中です...）。研究室内の連絡や情報共有には Slack や Wiki などを活用しています。また不定期で他研究室と合同の拡大ゼミを行ったり、有志で学内の統計学の研究会に参加したりもしており、国内外の学会で積極的に発表することを推奨しています。研究の奥深さを感じられ、楽しさを共有できる場にできればと思っています。

◆『教授・学習心理学』分野◆

◇清河 幸子 准教授

*関心領域

他者と協同する中で生じる様々なプロセス（思考の言語化、課題レベル—メタレベルの分業など）が問題解決に及ぼす影響を明らかにすることを目指しています。また、そこから派生して、洞察問題解決、アイデア生成、潜在学習といった複雑な認知活動がいかにして進展するのか、またそれらを促進するにはどうしたらよいのかについても関心があります。

*現在の研究テーマ

協同・洞察問題解決・アイデア生成・潜在学習

*最近の論文・著書

<論文>

山川真由・清河幸子 (印刷中). 共通点の探索による「目立たない」知識の活性化の促進
認知科学, 27.

寺尾尚大・高橋麻衣子・清河幸子 (2019). 音読時の構音運動と音声情報が文章理解に果たす役割
心理学研究, 89, 618–624.

山川真由・清河幸子・猪原敬介 (2017). 共通点の探索を通じた創造的な着眼点の発見——
対象間の関連性に着目した検討—— 認知科学, 24, 314–327.

植阪友理・鈴木雅之・清河幸子・瀬尾美紀子・市川伸一 (2014). 構成要素型テスト COMPASS
に見る数学的基礎学力の実態 —— 「基礎基本は良好、活用に課題」は本当か 日本教

育工学会論文誌, 37, 397–417.

Yamada, A., Fukuda, H., Samejima, K., Kiyokawa, S., Ueda, K., Noba, S., & Wanikawa, A. (2014). The effect of an analytical appreciation of colas on consumer beverage choice. *Food Quality and Preference*, 34, 1–4.

高橋麻衣子・清河幸子 (2013). 読解活動における眼球運動の役割——黙読時と音読時の比較から 認知科学, 20, 470–480.

Seno, T., Abe, K., & Kiyokawa, S. (2013). Wearing heavy iron clogs can inhibit vection. *Multisensory Research*, 26, 569–580.

Kiyokawa, S., Dienes, Z., Tanaka, D., Yamada, A., & Crowe, L. (2012). Cross cultural differences in unconscious knowledge. *Cognition*, 124, 16–24.

<著書>

清河幸子 (2019). こころの危機に対して心理学は何ができるのか 窪田由紀・森田美弥子・氏家達夫 (監修) 河野荘子・金子一史・清河幸子 (編著) こころの危機への心理学的アプローチ——個人・コミュニティ・社会の観点から—— (pp. 207–213) 金剛出版

清河幸子・犬塚美輪 (2019). 読解の個別学習指導における相互説明——対象レベル-メタレベルの分業による協同の効果を探る—— 市川伸一 (編) 教育心理学の実践ベース・アプローチ——実践しつつ研究を創出する—— (pp. 71–84) 東京大学出版会

清河幸子・鷺田祐一・植田一博・Eileen Peng (2016). 情報の多様性がアイデア生成に及ぼす影響の検討 鷺田祐一 (編著) 未来洞察のための思考法——シナリオによる問題解決—— (pp. 189–213) 勁草書房

清河幸子 (2015). 問題解決——協同が問題解決に及ぼす影響—— 北神慎司・林 創 (編) 心のしくみを考える——認知心理学研究の深化と広がり—— (pp. 57–68) ナカニシヤ出版

清河幸子 (2014). ひらめきと問題解決——洞察問題解決—— 関口貴裕・森田泰介・雨宮有里 (編著) ふと浮かぶ記憶と思考の心理学——無意図的な心的活動の基礎と臨床—— (pp. 67–78) 北大路書房

清河幸子・犬塚美輪 (2014). リーディング——読みにおける2つの越境 富田英司・田島充士 (編著) 大学教育：越境の説明を育む心理学 (pp. 33–43) ナカニシヤ出版

犬塚美輪・清河幸子 (2013). 「一人で読む」を超えて——ピアは理解をどう変えるか—— 中谷素之・伊藤崇達 (編) ピア・ラーニング——学びあいの心理学—— (pp. 91–104) 金子書房

清河幸子 (2013). 教室での学びの構成 速水敏彦 (編) 教育と学びの心理学——基礎力のある教師になるために—— (pp. 112–121) 名古屋大学出版会

*研究指導の方針・モットー

今秋誕生予定の研究室です。各自が研究発表を行い、参加者全員で検討を行う研究室ミーティングを週1回行いますが、個別相談は随時受け付けます。また、様々な領域の研究者の講演会やジャーナルクラブも定期的開催する予定です。自らが心の底から「知りたい!」と思える問いを設定し、知恵を出し合いながら、腰を据えて研究に取り組んでいける研究室にしたいと考えています。

◆『教育認知科学』分野◆

◇岡田 猛 教授

* 関心領域

新しいアイデアが生まれたり、新しい表現の形ができあがっていく過程を実証的に検討することに興味があります。最近、広い意味での芸術表現過程に関する心理学的研究をしています。それらの知見に基づいて、芸術表現活動の支援に関する実践研究も行っています。

* 現在の研究テーマ

芸術創作過程・芸術表現教育支援・創造的認知・創造的コラボレーション

* 最近の論文・著書

- (1) Matsumoto, K., & Okada, T. (2019). Viewers recognize the process of creating artworks with admiration: Evidence from experimental manipulation of prior experience. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*. <https://doi.org/10.1037/aca0000285>
- (2) Okada, T. (2019). Inspiration and artistic creation. Plenary talk(基調講演) *The 41th Annual meeting of the Cognitive Science Society*, Montreal, QC, Canada, July.
- (3) Shimizu, D., & Okada, T. (2018). How Do Creative Experts Practice New Skills? Exploratory Practice in Breakdancers. *Cognitive Science*, 42(7), 2364-2396. doi: 10.1111/cogs.12668
- (4) Ishiguro, C. & Okada, T. (2018). How can inspiration be encouraged in art learning? In T. Chemi, & X. Du (Eds.) *Arts-based methods and organizational learning: Higher education around the world*. 205-230. River publisher.
- (5) 石黒千晶・岡田猛(2017) 芸術学習と外界や他者による触発：美術専攻・非専攻学生の比較 *心理学研究* 88(5), 442-451
- (6) Okada, T. & Ishibashi, K. (2017). Imitation, inspiration, and creation: Cognitive process of creative drawing by copying others' artworks. *Cognitive Science*. doi:10.1111/cogs.12442
- (7) Ishiguro, C., Yokosawa, K., & Okada, T. (2016). Eye movements during art appreciation by students taking a photo creation course. *Frontiers in Psychology*, 7:1074. doi: 10.3389/fpsyg.2016.01074
- (8) 石黒千晶・岡田猛 (2016). 創造的教養を育む芸術教育実践：日常の写真創作活動に及ぼす効果 *認知科学*, 23, 221-236.
- (9) 中小路久美代・新藤浩伸・山本恭弘・岡田猛編 (2016) . *触発するミュージアム：文化的公共空間の新たな可能性を求めて*, あいり出版
- (10) Nomura, R., Liang, Y., and Okada, T. (2015). Interactions among collective spectators facilitate eyeblink synchronization. *PLoS ONE*. 10 :e0140774, doi: 10.1371/journal.pone.014774.
- (11) Nomura, R., Hino, K., Shimazu, M., Liang, Y., & Okada, T (2015). Emotionally excited eyeblink-rate variability predicts an experience of transportation into the narrative world. *Frontiers*

in Psychology. doi: 10.3388/fpsyg.2015.0447.

- (1 2) 中野優子・岡田猛 (2015). コンテンポラリーダンスにおける振付プロセスの解明. *舞踊学*, 38, 43-55.
- (1 3) 高木紀久子・河瀬彰宏・横地早和子・岡田猛 (2015). 現代美術家の作品コンセプト生成過程に関するケーススタディ:インタビューデータの計量的分析に基づいて *認知科学*, 22(2), 235-253.
- (1 4) 清水大地・岡田猛 (2015). ブレイクダンスにおける技術学習プロセスの複雑性と創造性 *認知科学*, 22(1), 203-211.
- (1 5) 野村亮太・岡田猛 (2014). 話芸鑑賞時の自発的なまばたきの同期 *認知科学*, 21(2), 226-244.

*研究指導の方針・モットー・研究室の雰囲気

私の研究室では、「芸術創作過程」や「表現活動」という、心理学的な研究がまだ十分に進んでいない野心的な研究テーマを取り上げ、フィールドワークや実験などのマルチメソッドを用いて研究を進めています。現在、学部で心理学を専門に学んだ院生に加えて、アーティストやダンサー、デザイナーなどのバックグラウンドを持つ院生もいて、日々面白い研究活動が進行していると思います。

モットー: 「やってみる価値のあること、それは失敗してみる価値のあることだ。
(H.A.Simon)」

◆『発達心理学』分野◆

◇遠藤 利彦 教授

*関心領域

発達心理学 (関係性と子どもの社会情緒的発達・生涯発達心理学・進化発達心理学)
感情心理学 (感情の進化論/文化論・感情知性・社会的感情の機能性/合理性)
教育心理学 (保育・クラスの感情風土・教師-生徒間関係性・学級サイズと非認知的発達)
異種心理学間の理論的統合 (認知・発達・臨床・教育・社会・脳神経等領域間の架橋)
心理学の方法のメタ理論

*現在の研究テーマ

発達心理学に関しては、元来、発達における、いわゆる遺伝と環境の問題に関心を有しているのですが、特に、養育者と子どものアタッチメントや初期の感情的コミュニケーションが、遺伝(進化)と環境のどのような要因によって規定され、また個人の生涯に亘っていかなる発達の帰結をもたらすのかということに関して比較的多く論考を行っています。また、最近ではアタッチメント理論との関連で、保育や幼児教育、また病児保育のあり方などについても考えています。加えて、虐待やネグレクトといった不適切な養

育を受けた子ども、あるいは乳児院や児童養護施設等で生活する子ども、の発達およびそうした子どもへの心理的ケアということに関しても、様々な現場の先生方との共同で研究を行っています。

感情心理学に関しては、種々の感情、特に社会的感情や自己意識的感情が、私たちの日常生活においてどのような合理性や機能性を有しているかについて、進化的視座と文化的視座の両方を交えて、理論的に考察しています。最近では、これに関連して、時にEQとも言われる感情的知性、あるいは幼児教育の術語で言えば非認知的な心の特性が、本来、心理学の中でどのようなものとして扱われるべきかということにも関心を抱いています。

◇主な著書

- 『「情の理」論：情動の合理性をめぐる心理学的考究』（単著）（東京大学出版会）
『読む目・読まれる目：視線理解の進化と発達の心理学』（編著）（東京大学出版会）
『本当のかしこさとは何か：感情知性(EI)を育む心理学』（共編著）（誠信書房）
『赤ちゃんの発達とアタッチメント：乳児保育で大切にしたいこと』（単著）（ひとなる書房）
『言葉・非認知的な心・学ぶ力』（共著）（中央法規）
『乳幼児の発達と保育-食べる・眠る・遊ぶ・繋がる-』（共編著）（朝倉書店）
『心のかたちの探究：異型を通して普遍を知る』（共編著）（東京大学出版会）
『発達科学ハンドブック5：社会・文化に生きる人間』（共編著）（新曜社）
『よくわかる情動発達』（共編著）（ミネルヴァ書房）
『甘えとアタッチメント』（共編著）（遠見書房）
『発達心理学の新しいかたち』（編著）（誠信書房）
『アタッチメントと臨床領域』（共編著）（ミネルヴァ書房）
『アタッチメント：生涯に亘る絆』（共編著）（ミネルヴァ書房）
『乳幼児のこころ：子育て・子育ての発達心理学』（共著）（有斐閣）
『赤ちゃん学を学ぶ人のために』（共編著）（世界思想社）
『喜怒哀楽の起源』（単著）（岩波書店） など

◇最近の主な論文

- 遠藤利彦 (2020). 「情の理」論：感情の中に潜む合理的なもの. 臨床心理学, 20(3), 262-265.
遠藤利彦 (2020). アタッチメント研究の現在とこれからの行方. 教育と医学, 796, 4-11.
Kawamoto, T. & Endo, T. (2019). Sources of variances in personality change during adolescence. *Personality and Individual Differences*, 141, 182-187.
遠藤利彦 (2018). アタッチメント理論における基点と現代的展開. こころの科学, 198, 1-16.
遠藤利彦 (2018). 赤ちゃんとつながる：アタッチメントが心身発達に及ぼす影響. 小児看護, 41, 244-249.
遠藤利彦 (2018). 「学力の評価と測定をめぐる」：「非認知」なるものの発達と教育：殊に学力形成との関わりにおいて. 教育心理学年報（日本教育心理学会）, 57, 220-225.
榎原良太・富塚ゆり子・遠藤利彦 (2017). 子ども・保護者との関わりにおける保育士の認知的な感情労働方略と精神的健康の関連. 発達心理学研究, 28, 46-57.
遠藤利彦 (2017). 親子関係と非認知的な心の発達. 日本教育, 470, 6-9.

- 遠藤利彦 (2017). アタッチメント理論を概括する. *こころと社会* (日本精神衛生会), 48,84-88.
- 遠藤利彦 (2016). アタッチメントとレジリエンスのあわい. *子どもの虐待とネグレクト* (日本子ども虐待防止学会機関誌), 17, 329-339.
- 遠藤利彦 (2016). アタッチメント理論から見る病児ケア. *医療と保育*, 14, 58-66.
- 川本哲也・榊原良太・村木良孝・小島淳広・石井悠・遠藤利彦 (2016). 体験活動を通じた大学生の社会情緒的発達: 感情制御に着目して. *発達心理学研究*, 27, 32-46.
- 遠藤利彦 (2016). 利己と利他のあわい: 社会性を支える感情の仕組み. *エモーション・スタディーズ* (日本感情心理学会誌), 2, 1-6.
- Sakakibara, R. & Endo, T. (2015). Cognitive appraisal as a predictor of cognitive emotion regulation choice. *Japanese Psychological Research*, 58, 175-185.
- Kawamoto, T. & Endo, T. (2015). Personality change in adolescence: Results from a Japanese sample. *Journal of Research in Personality*, 57, 32-42. .
- Kawamoto, T. & Endo, T. (2015). Genetic and environmental contributions to personality trait stability and change across adolescence: Results from a Japanese twin sample. *Twin Research & Human Genetics*, 18, 545-556.
- 遠藤利彦 (2015). 進化的アタッチメント理論から見る子ども期の被養育経験と生涯発達. *チャイルド・サイエンス* (日本子ども学会誌), 11, 4-8.
- 川本哲也・遠藤利彦 (2015). 青年期における非言語性知能の発達とコホート効果. *発達心理学研究*, 26, 144-157.

*研究指導の方針・モットー

原則週1回の定例の研究室内検討会と、1~2ヵ月に1回程度の学外研究者も交えた拡大研究会等において、研究室メンバー全員で各自の研究の検討を行います。もちろん、要望に応じて随時、個別的な相談にも応じます。基本的に、各自が追究したいテーマを最大限に尊重し、教員は黒子となってそのサポートをするという方針を有しています。また、研究をするからには、たとえピンポイントでも、自身の研究テーマに関しては、他の誰よりもよく知り、その動向に敏感であり、かつそれが心理学全体の中でどのような位置づけなのかをちゃんと俯瞰できるようになって欲しいと思っています。問うに値する問いを自ら見出し、それに鋭く明快な論理性をもって切り込むことのできるような研究者を理想とします。

*研究室の雰囲気

最近、かなり大所帯になってきており、またそれぞれの研究テーマも発達・保育・教育から感情・人格・障害まで、対象とする年齢層も胎児期・乳児期から中高年期まで、方法も質的研究法から量的研究法までと、実に多種多様なのですが、院生の皆さんはとても仲良く、自主的に研究会や読書会などを行うことを通して、互いの研究を高め合っているようです。

◇針生 悦子 教授

*関心領域・研究テーマ

子どもが、人や出来事のことをよりよく理解し考え、また、よりうまくコミュニケーションできるようになっていくプロセスに関心があります。特に、そうした発達の中で、ことば——言語そのものから、ことばにしてみることに、ことばで説明すること伝えること——が、どのような役割を果たしているのか、ということに興味があります。研究の対象は、乳幼児期が中心です。保育園・幼稚園などでの実験・観察などのほか、0～2歳くらいまでの子どもを対象とした研究のために赤ちゃんラボを運営しています。最近の研究室内での研究テーマには、以下のようなものがあります。

- ・子どものことば（単語、擬音語、文字）の学習
- ・大人の子どもの働きかけと子どものお話する能力の関連
- ・他者の気持ちの理解やそれへの対処の発達
- ・バイリンガル環境で育つ子どもの発達
- ・方言を話す人についての理解、その発達

*最近の論文・著書

【論文】

- 1) 金重利典・針生悦子・奥村優子・小林哲生 (2019). 3-5歳児は出身地の方言話者から学ぼうとするか？—東京方言と岡山方言の比較— 電子通信情報学会技術報告（資料番号 HCS2018-61）, 118(437), 77-82.
- 2) 池田慎之介・針生悦子 (2018). 「幼児期から児童期の子どもにおける発話からの感情判断の発達」 心理学研究, 89, 302-308.
- 3) Sanefuji, W. & Haryu, E. (2018). Preschoolers' development of theory of mind: The contribution of understanding psychological causality in stories. *Frontiers in Psychology*, <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2018.00955>
- 4) 針生悦子 (2018). 「日本語の擬音語“感覚”の発達」 子ども学, 6, 22-35.
- 5) Yamamoto, H.W. & Haryu, E. (2018). The role of pitch pattern in Japanese 24-month-olds' word recognition. *Journal of Memory and Language*, 99, 90-98.
- 6) Kaneshige, T. & Haryu, E. (2017). Infants predict expressers' cooperative behavior through facial expressions. *PLoS One*, e0185840. doi: 10.1371/journal.pone.0185840
- 7) 浜名真以・針生悦子 (2016). 15-18か月児の母親による子どもへの感情語入力. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 55, 261-268.
- 8) Haryu, E. & Kajikawa, S. (2016). Use of bound morphemes (noun particles) in word segmentation by Japanese-learning infants. *Journal of Memory and Language*, 88, 18-27.
- 9) 梶川祥世・針生悦子 (2016). 擬音語発話音声の高さが幼児の語認知に及ぼす影響. 認知科学, 23, 37-48.
- 10) 池田慎之介・針生悦子 (2016). 発話からの感情判断におけるレキシカルバイアス：その発達の機序をめぐって. 認知科学, 23, 49-64.

【著書】

- 1) 『赤ちゃんはことばをどう学ぶのか』（単著）中公新書ラクレ
- 2) 『言語心理学』（単編著）朝倉書店

3) 『言葉をおぼえるしくみ』 (共著) ちくま学芸文庫

*研究指導の方針・モットー

研究指導は、個別バージョンと、研究会バージョンの2本立てです。つまり、院生各自の研究について個別の相談にも応じますが、できるだけ研究室の院生全員が参加する検討会(週1回)で発表してもらい、研究室のメンバーみんなで、その研究をよいものにするためにはどうしたらよいかについて考えるようにしています。ほかに、研究室では乳児を対象とした研究も実施しており、その時々メンバーの関心に応じて共同研究なども行っています。定期的に2歳くらいまでの赤ちゃんと接する機会があるので、いろいろ(研究!だけでなく、人間というものや、人生について!)考えるヒントになっています。

— 兼任教員 —

◆ 『教授・学習心理学』 分野 ◆

◇ 植阪 友理 准教授 (高大接続研究開発センター)

◆ 『教育情報科学』 分野 ◆

◇ 宇佐美 慧 准教授 (高大接続研究開発センター)